

〇〇してみました世界のフィールド

# 初航海の ふがいなさ

須藤 健一 民博館長



帆網で帆の角度を調整する筆者

外洋航海してみました

フィールドに飛び込んだ研究者は、目と頭を使うだけでなく自らの身体も使って調査をする。その貴重な経験から、見えてくるものとは。第1回目は、民博館長によるミクロネシアの大海原での冒険譚である。

オセアニア展示場に雄姿を見せるチエチエメ二号は、一九七五年に三〇〇〇キロの大航海をなしとげ、沖縄国際海洋博覧会に参加したカヌーである。

チエチエメ二号の故郷サタフル島は、先祖伝来のアウトリガー・カヌーを駆使して外洋航海をおこなう航海師がいることで注目されてきた。その技と知識が、失われていたオセアニアの大型カヌーと航海術を復興させたからである。

わたしは一九七八年から八〇年にかけて延べ二五か月、サタフル島へ航海術の調査に赴いた。サタフルはミクロネシア連邦ヤップ州の州都から一〇〇〇キロ東方のサンゴ礁島。三か月に一度、五〇〇トンの連絡船が通う、周囲六キロ、人口五〇〇人の絶海の孤島である。船上二〇泊の船旅でたどり着いた。

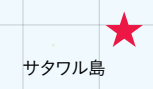
### カヌー航海事はじめ

一九七九年一月に初航海の機会に恵まれる。西隣のラモトレク島へ病人見舞いに行くカヌーに便乗した。老女と孫娘とその一族の五名の男性にわたしが加わった。航海師は信望の厚い若者で老女の甥。長老の天気予測も間かず、気のせく老女は朝九時ごろにカヌーを出させた。

ラモトレク島はほぼ真西にある。東からのうねりを目安にカヌーを進める。しかし、海面は鏡のよう。じりじりと照りつける太陽のもとでの船旅である。年配の男が「風よ来い。風よ来い」と風車に呪文を唱えるが、そよ風が吹くのみ。

老女の口ずさむ歌が波切音と調和して心地良い。航海師はその歌の意味を老女に尋ねるが、老女は教えない。彼女は小さいころから著名な航海師の父に連れられて島々を航海し、海の知識を身につけたという。航海術は男性の世界だが、彼女の知識は二目おかれている。夕方に後方のサタフル島が視界から消えた。二六キロ進んだだけ。

タロイモと魚の夕食を終えた日没のころから心細くなってきた。全長八メートル、狭い客室と甲板の他に休む場所もない。船体は海面からわずか



サタフル島

この苦い体験がやみつきになり、その後も暗礁への魚釣りや無人島へのカメラ捕りのカヌー航海を試みた。しかしながら、星と波と風にもとづく伝統的航海術を十分に学ばずに海へ出て、自分自身の忍耐のなさや航海術の知識の未熟さに打ちのめされた若いころの調査は、特別な思い出である。

### 嵐と漂流と後悔と

三〇センチ浮いているのみ。わたしの寝る場所は、一メートル足らず幅三〇センチの横木の上。足をのばすと膝から下が海に入る。フィールドワークとはいえ、どうしてこんなカヌーで航海に出たのか？ 風が来て船体に海水が入ったらどうなるのか。などなど、不安が恐れになる。悪い状況を想定してはため息をつくばかり。

日没後、北東の風をうけてスピードが出る。進行方向右手の水平線低くにある北極星と左手の中空に輝く南十字座から針路を割り出して進む。上空には天の川が横たわっている。航海師が中間点に来たと告げた一時ころ、前方に雲が湧き上がる。あつという間に全天雲に覆われ、年配の男が法螺貝をふいて呪文を叫び、嵐除けを試みるが効果なし。月も星も隠れた暗闇となり、「この世の終わり」という絶望感にさいなまれる。

航海師は帆をおろして漂流の道を選ぶ。熱帯とはいえ風雨のなかで体は冷えて震える。ますます、不安がつり、悶々とする。こんな気持ちを航海師に投げつけられない。とそのとき、救いの知恵が浮かんだ。「カヌーは木製、沈むことはない」「わたしは泳ぎに自信がある」「この海域には猛なサメはいない」。よって、何があってもカヌーにしがみついて風をやり過ぎせばよい。危機的状況下でこの単純明快な答えがわたしの恐怖心を掃として、正常心で航海することができた。

二時間ほどカヌーを流し、風が去ったので帆を上げることになった。しかし、若き航海師は、漂流後のカヌーの位置を見失い、どの方位にカヌーを進めるのか混乱した。そこで、やおら携帯無線機でサタフル島の父に、カヌーがどこにいるかと聞いている。情けない航海師である。父の指示どおり、帆をおろした位置まで戻って、そこから目的地へとカヌーを進めた。横木の上でまごころみ、日の出とともに六時半ごろに目を覚ますと、前方に平らなラモトレクの島影が目に入った。



アウトリガー側から風を受けて進むカヌー



人と荷物をおくカヌーの客室